

おし かわ ふみ こ  
押 川 文 子

インド社会は、カーストの階層性が経済や政治面での上下関係と不可分に結合した固定的な社会と考えられがちである。そのインドで、近年、中・小規模農民や都市中間層を中心とし、カーストではおおむね中間的な位置にある諸集団（ここでは中間カーストと呼ぶことにする）の、政治や経済のさまざまな分野における顕著な台頭が目立ってきた。地域的な相違も大きいものの、いくつかの州では州政治においても一大勢力を確立しつつある。

こうした動きは、独立後の諸制度改革や経済発展などを通じて、インドが独立当初の比較的基盤の小さい「ミドル・クラス」主導型の国家からより大衆的な基盤をもつ国家へと、徐々に脱皮しつつあることを一面では示している。しかし同時にその過程が、各層の間に錯綜する厳しい対立をもたらすものであったことも否めない。彼らの台頭は、従前から支配的地位にあった層のみならずいわゆる不可触民を中心とする農業労働者などの間にも緊張を高め、多くの場合「カースト対立」として表面化した。インドの政治経済のどのような特質が、カースト集団の台頭やカースト対立といった現象をもたらしたのか、またカーストは政治や経済の変動とどのように関連し変質していくものなのか。こうした中間カーストの台頭をめぐるいくつかの問題は、今日のインド社会経済の性格を端的に示すとともに、今後のインドの発展の条件と方向を考えるうえでも一つの鍵となる。

アジア経済研究所では1987年度、中間カースト諸集団の台頭の諸条件と程度、およびインドの社会経済に与える影響を考察することを目的として、「北部インドにおける中間カーストの台頭と社会経済発展」（地域研究部、主査・押川文子）と題する共同研究を実施した。本特集に含まれている6篇の論文はその成果の一部である。

共同研究のアプローチの特色はそのままこの特集のねらいとも重なるので、ここで若干触れておきたい。

第1点は多面的なアプローチの重視である。ヒンドゥー教徒の固定的な身分制度としてのみカーストをみるような議論はすでに影をひそめたものの、経済や政治の状況を短絡的にカーストに結合する論調は現在も往々にして見受けられる。こうした論調は結果的に、インド社会に生起する変化の特質をカーストという「伝統」に還元することによって、一方ではカーストに固定的というイメージを付し、他方では社会経済発展のダイナミズムを

看過する傾向をもたらした。本共同研究では、いくつかの分野からそれぞれの手法で中間カーストの台頭という事象をとらえ、そのうえで相互の関連を考えるという、いわば学際的な地域研究としてカースト論を目指すことによって、この点の克服を試みた。

第2点は、カーストがインド社会に生きる人々によってどのように理解され、社会のなかに位置づけられているかという問題について、かなりの重点をおいたことである。カーストに関する認識は、時期や状況に応じて決して一様ではなく、また必ずしも実態に即して形成されてきたものでもなかった。しかし同時に、その時々 of 支配的なカースト認識、とくに法や行政のそれは、カーストの変容と主体的な運動に枠組を与え、実態そのものを少なからず改編するものであった。今日の間接カーストの動きを考えるうえでも、留保制度の運用を焦点とする公的なカースト認識が、カーストの機能やイデオロギーに与える影響は大きい。共同研究では、経済や政治面での諸条件の変化とともに、この問題も重要な柱としてとりあげた。

最後に、中間カーストの存在形態に地域的な相違が大きいことを考慮して、ウッタル・プラデーシュ州を中心とする北部インドを主たる分析地域とした。この地域は、いわゆるヒンディー・ベルトの中心として、全インドに大きな影響を与える地域である。また、中間カースト集団の台頭が上位と下位の両面で三つ巴の対立を招いているという点において、インド各地の状況の縮図ともなっている。同時に、西部、南部を1州ずつとりあげ全体として一応全インドを視野にいれた。

今回掲載する6論文は、中間カースト問題を諸側面から考察したものであり、共同研究のいわば第1段階の成果である。取り上げることのできなかつた重要な問題も多く、また全体像を描くまでには、まだ個々の問題の掘下げが必要であろう。今後の課題としたい。

本特集の構成と各論文について簡単に触れておく。

押川文子、山口博一、藤井毅の3論文は、いずれもカーストに関する認識の問題を取り上げている。押川と山口は、ともに州レベルに設置された後進諸階級委員会の報告書を分析の対象とした。押川は、カルナータカ、グジャラートの2州を事例として今日のインド社会におけるカーストについて基本的に異なる認識が併存していることを強調し、また山口はビハール州におけるカーストの状況を念頭に、経済的な上昇がかならずしも教育や社会的な地位の向上にまでは至っていない中間カースト集団の状況に焦点をあてて、同州の

委員会報告書の内容を分析した。藤井はカースト団体に関する諸研究の批判的検討を通じて、社会人類学における史的過程の軽視と歴史学におけるカーストの実証的研究の欠如が、植民地時代以降のカーストの変容過程についての実りある議論を不可能としている状況を明らかにし、中間カーストの分析の前提となるカーストという概念自体についての再検討を求めた。

多田博一、堀本武功、福永正明の3論文はウツタル・プラデーシュ州を対象地域としている。多田は、1965年以降の農業政策と農業発展の分析を通じて、中農層の経済基盤の拡大がある程度認められることを指摘し、それが中間カーストに与えた影響を示唆した。堀本は農民党として登場したインド革命党を取り上げ、その性格を分析するとともに、会議派に対抗する勢力としての限界も指摘している。福永は、州東部の農村調査を事例に、村落レベルにおける中間カーストと上位および下位カースト集団の「二重対抗関係」について考察を加えている。これらの3論文は、それぞれの視点から、中間カースト集団の経済的・政治的台頭の状況とその背景を分析した結果、今後の展開には制約も大きいことを示唆している。

なお表記については、地名等については統一に努めたが、集団カテゴリーの名称などについては、原則的に執筆者の判断に委ね、一部不統一な部分を残している。

最後に、所外から活発な議論と労作をもって参加して下さい、多田、福永、藤井、堀本の各氏に対し、心からお礼を申し上げたい。

(アジア経済研究所地域研究部)